

《資料紹介》

ある「満洲国」軍官の日記『轍印深深』

李

青

『轍印深深』（全四巻）（轍：てつ。車を通ったあとに残る車輪の跡の意。書名を直訳すると、車を通ったあとに轍がくっきりと残っているという意味）は、吉林省政治協商文史資料委員会と吉林市檔案局の共同編纂で2011年9月に内部発行資料として整理・出版された資料である。編集委員会のメンバーである東北師範大学の曲曉範先生からの提供で、該資料を入手した。

貴重な資料であるがゆえに、大変研究価値のあるものと思われる。まずは、資料の性質や内容について、紹介することにした。

『轍印深深』は満洲国時代に警察官を務めていた施明儒の日記である。日記名『轍印深深』は編集委員会により、整理・出版後に付けられた書名である。日記は1938年1月1日から1945年12月31日にわたり、自らの私生活及び仕事にかかわる身边に起こった細々した出来事について、丹念に記録されている。

まずは、日記の著者について見てみたい。

施明儒は1913年10月19日、吉林省梨樹県の生まれである。1935年、22歳で通信兵として敦化県に出向いた。仲良しの三、四人と“国民党東北流亡抗日救国社”を密かに組織した。当時の彼は中国国民党员でもなければ、国民党組織との関係はなかったし、中国共産党とも無関係だったから、既成政党から何らかの援助を受けて結成したわけではなかった。その後、仲間の二人が殉職し、会の活動は休眠期に入った。1938年に満洲軍官学校に合格した。1941年に卒業してから吉林に戻り、吉林市独立通信隊副隊長に就任した。同年5月に再び四人の青年と“国民党東北流亡抗日救国社”を復活させた。今度は多くの愛国青年を周辺に引き寄せることができた。1942年に施明儒は転

(1) 第一巻「前書き」（中国語原文『写在前面』）1～3頁参考。

職させられた。当局の公的な施設に様々なテロ的な破壊活動を企てたが、秘密を漏洩され、成功には至らなかった。

日記は自分の内面を如実に吐露するものであり、作者の精神世界を窺うことができる。秘密裏に書いた施明儒の日記は異民族支配下にある「満洲国」のもとであるゆえ、当時の社会の有り様、それに対する理解及び人々の心象風景の解析などの側面から、日記内容の貴重性と史料的価値が高いと考えられる。

施明儒の日記を編纂した編集部によると、日記の発見は文化大革命時の家宅捜査によるものであったという。当初は焼却処分が決まっていたが、5人の有識者が密かに盗み出し、枕の中に隠し持っていたお陰で、今日までに保存することができた。文化大革命の収束後に紆余曲折を経て、吉林市檔案館に移行された。編集委員会は日記を編集中に、著者の生まれ故郷の吉林省梨樹県郭家店に出向き、著者の行方や末裔を探したものの、その痕跡はなかったという。現時点では、著者の1946年以後の足取りは不明である。当然ながら、日記の内容について当人による確認作業が不可能になったわけである。

日記の内容を見渡すと、内容は多岐にわたる。国際情勢、時事問題に対する分析、秘密結社の事情の他に、町をぶらぶらして、買い物したり、友人を訪ねたり、恋文、観劇など……些細な生活の一コマ一コマを丹念に記録に残していた。登場する人物の細かい描写や歴史、政治、文化に関わる事件または故事まで幅広く書かれている。

日記は漢文体がほとんどであり、そのなかに白話文体で書かれた箇所もある。曜日は中国語の記述である「星期」で書いた箇所と日本語の「曜日」で書いた箇所が混ざっていた。日付は西暦と陰暦とを並んで記述していた。

日記を読んでみると、著者は警察署で勤務しているにも拘わらず、面従腹背的な一面が感じられる。日本の東北占領、中国への侵略に対する敵愾心が日記全体から滲んでいる。特に、日本兵が東北で犯した罪の数々を当事者として記しておいたことは史的な価値が高いと思われる。

日記の第一巻は1938年1月1日～1941年5月31日のものである。日中全面戦争開始の直後ということで、著者は民族の前途を憂慮し、戦局に関心を寄せる箇所が随分見られた。新年早々に“私の血はどこへ流れていく”という題で日本の侵略に対して非難するとともに、「全国統一し、挙国を明朗にし、

睡っている獅子は目覚めようとし、雄しい威力を再び発揮」（全華統一，舉國明朗，睡獅既醒，雄威再振。）〔第一卷 P3〕することを渴望した。日本に対して「倭賊」と蔑称を使用した。

施明儒は職務上短波ラジオを聞くことができたことに注目したい。1月14日の日記によると、「夜八時にハバロフスクの中国人労働者の演説やソ連のスターリンによる党内肅正報告及びシンガポール英国軍備状況の放送を聞いた」（夜八句鐘聽哈巴羅夫斯庫州中國勞動者講演，蘇聯史塔林（斯大林）清黨報告及新加坡英軍備近況等放送）〔第一卷 P8〕とある。他にもラジオから得られた情報に基づく時事評論が随所に見られた。

第二巻は1941年6月1日～1942年5月31日のものである。

この巻では、時事評論が目立っていた。把握された情報はかなり正確だと見られる（一部は歴史事実を確かめる必要があるが）。

第三巻は1942年6月1日～1943年5月31日のものである。

このあたりはちょうど著者が28歳～29歳の男盛りの年齢であり、熱愛していたので長い恋文が多かった。中に恋人の李雲儒に宛てた手紙や彼女の返事を再録したものがあり、恋人同士が互いに慕い合う切々たる恋心を吐露する日記も多数見られた。

第四巻は1943年6月1日～1945年12月31日のものである。

本巻では八路軍についての記述や日本兵の残虐行為を暴露する記録が多く見られる。戦線拡大に伴い、モンゴル兵やソ連兵に触れる記述が見られるようになった。日記は日本の敗戦まで綴り続けられていた。

これまでに共産党が率いた八路軍についての記述は正面から扱うものばかりであったが、施明儒の日記では、マイナスイメージが伝えられてくることが興味深い。

1945年3月24日の日記によると「八路軍がここから1km離れた村－大莊窠に侵攻してきた。手榴弾を投げつけ、二人が負傷し、九匹の馬のうち、一匹を死なせた。事後彼らが逃亡し、〈残された－筆者加筆〉村人の老若男女はすべて捕らえられるほど、大きな災難がおとずれていた」（八路軍居然侵入距此二里許の村莊一大庄窠，以手榴彈擊傷二人，馬九，死馬一匹，事後他們是遁去了，可是大庄の百姓卻吃苦了！無分老幼全被捕監）〔第四卷 P181〕。八路軍が日本軍に与えた打撃のツケは一般の民間人に回されたと批判的な立

場で書いたと読み取れる。

さらに日記にこのような記述がある。政府軍を率いて、酷寒を冒し、八路軍討伐の遠征に出かけるという。本当は八路軍の捕虜を捕らえてうれしかったはずであるが、瞬く間に寝返ってしまった変節者に対して、軽蔑する気持ちを顕わにした。

1945年3月14日の日記はこう記している。「午後、私を招いて情報班は座談会を開いた。席上捕虜の韓を拷問した。5つの平手打ちにヤカン半分の冷水を飲ませると、慌てふためいて、ただちに自分が共産黨員だと、敵の法廷前で秘密を吐いてしまった。さらに家族を迎え入れ、保護して欲しいと哀願し、喜んで何でも協力することを約束した。私は心から憤慨した。堂々たる共産黨員なのに、犬猫にも及ばず、女よりも弱い！」（午後、情報班開座談會，邀余參加，席間拷問俘虜韓某，五個嘴巴半壺水，便屁滾尿流，在敵人法庭前吐露了真秘密，承認是共產黨員，更搖尾乞憐懇乞將伊家屬接來加以保護賞碗飯吃，伊甘願效勞！……可真把我氣壞了，堂堂黨員貓狗不如，較女人尤弱！）[第四卷 P180]。

日本の暴挙を暴露する内容は随所にある。例えば、有名な潘家峪虐殺殺傷事件を取り上げた日記があった。1945年1月27日の日記では兵營の近くに住む住民から聞いた話をまとめた形で書いている。要約すると1941年の秋に、潘家峪で十数体の日本兵の遺体を発見した。それは八路軍が殺してから埋めたものであった。しかし、姿をくらました八路軍に仕返しを取る手立てもなく日本軍は村人に復讐した。村人を一箇所を集め、集団で惨殺した。「2400余人の悲鳴はだんだん聞こえなくなった。250世帯のうちその日のうちに160世帯が絶滅させられた。一人も生存者がいなかった！」（兩千四百餘人的號啕慘叫也漸漸歸於滅絕！二百五十戶裡約有百六十戶以上當日絕後！一丁未剩）⁽²⁾ [第四卷 P159]。関連資料によると、当時村にいた1,537人のうち、1,230人が犠牲になったという。

戦争が終わりに近づくにつれて、国境の戦況を反映する日記が目立ってきた。1945年4月29日の日記によると、「これはモンゴル騎兵が漢族に残した一大残虐な歴史だ！13歳の少女が強姦されて死亡。21歳の婦女が16人に蹂躪

(2) Bai du 百度 (<http://baike.baidu.com/> 中国語版)「潘家峪惨案」参考。

されて死亡し、50歳の老婆も逃れることがなかった。婦女が侮辱されてから六、七割が惨殺された。6歳の幼児が刃物で胸を貫通されてから、壁の外側に投げつけられた。村人の七、八割が殺害された。民衆は激昂し、八路軍と連合し、農具を武器にして、大逆襲を敢行した。モンゴル軍の大半を死傷させた」(這裡有蒙古騎兵留給漢族的一頁慘史!一十三歲女童因受強奸活生生的被蹂躪死!二十一歲少婦受十六人輪姦致死,五十餘歲的老婦都受了汚玷婦女被姦污後受刀刺而死的居十之六七,六歲幼兒被刺刀貫腹擲餘牆外,總計全村男女死亡十之七八,因而激起民衆的憤慨,聯合八路以農具為武器在這兒敢行大襲擊,使蒙軍死傷大半)[第四卷 P188]。

1945年9月9日の日記は南京において日本軍が降伏する文書に調印することをきめ細かく記録し、勝利の喜びを表した。「本日の午前九時に、中国を侵略した日本軍が南京で我が国に投降儀式を行ってくれた。我が同胞は歴史的な記念日九・九・九を忘れてはならん!これは我がすべての中国人が明記すべき日である。それはわが祖国の復興の始まりの日だからである。それは八年間の抗日の勝利の花である。この九・九・九の日にあたり、百万ものの侵略大軍はついに頭を垂れて、我々に投降した。」(今天上午正九時,侵略中國的日軍在南京向我們行了“投降式典”。一國人勿忘“九・九・九”這一個具有歷史意義的日子!這該是我們每個中國人所應該銘記的。因為它是我們祖國復興的啟始,是八年抗戰獲得的勝利之花。這在“九・九・九”這個時刻,百萬侵略者的大軍,終於低頭下氣的向我們投降了)[第四卷 P238]。

著者施明儒は日記のなかで自身の病に触れる箇所も多くあった。頭痛は激務や極寒によって、頻繁に出た。持病のように感じられるほどであった。長期間の強行軍、悪環境、衛生条件の悪さなどで脚を化膿し、歩行困難に陥ってしまった。軍官の状況でさえこのような有様であるならば、一般兵士のことはなおさら想像を絶するほど厳しいことであろう。

日記の記録者は旧軍人にも拘わらず、自分の祖国、故郷、家族を心の底から熱愛している。その溢れんばかりの熱い感情が日記の各頁ににじみ出ていることが読む者の胸を熱くした。異国支配の厳しい状況の下で身の出来事を記録するばかりでなく、世界情勢や中国国内の様々な事情に気を配り、最大の関心を寄せていた。短波ラジオや各種新聞を入手する特権を持っていることで、比較的正確な情報をキャッチすることができていた。日本の中国へ

の侵略、満洲国内で犯した罪を暴露し、独自の時事情勢や戦局を分析した。当時の軍人生活、軍官の処遇及び軍旅生活について垣間見ることができた。満洲国内の青年軍官の精神世界を理解するには、日記が格好の資料であることは疑いない。

なお、日記の著者の恋愛に関する記述を通じて、当時の若者の恋愛観、精神世界を理解することができた。日常生活についての描写も当時の生活の一コマであり、満洲国時代の全容を把握するには、貴重な記述と言えるだろう。

日記は読み物という観点から見ても、読み応えがあった。文体の流れが流暢であり、修辞も美しい。著者の教養と文学的な素養の高さを物語っている。

しかしながら、筆者は日記を通読する過程でいくつかの疑念を抱いている。日記は満洲国に所属する軍事部署の軍官の手によるものである。内容的に日本の侵略、社会の暗黒面を何の隠蔽の言い回しも使用せず、ストレートに感情に任せての批判と檄文であったことに仰天させられた。当時の厳しい検閲制度や密告行為の横行などから鑑みれば、このような露骨な長文の日記の作成は如何なる困難であることが容易に想像できる。発覚された後の怖さは言うまでもない。いったい、どのような環境の下で、どのように監視の目を盗み、作成し続け、発覚されずに隠し持っていたのだろうか。まさに命の危険を顧みずに記した日記だと言えよう。

日記の発見からその後の保存状況、さらに整理・出版するまでの過程が不明瞭なところがある。日記は2011年9月に発表するまでの三年間の整理期間を要したと編集部が説明している。その期間中にどのような形で、何をどのように編集したのかは、不明な点が多い。日記の文言、特に日本の侵略を批判する文言の強烈さ、言い回しなどは当時の国統区（国民党の統治区域）、解放区（共産党の統治区域）乃至現在に使われている文言に酷似している箇所があることから、思わず編集過程による書き足しまたは書き換える作業が為されていないかと詮索せざるを得なくなった。つまり、現在の政治情勢の下で、都合の悪い箇所を削除し、もしくは書き換えられた可能性がないとは言い切れない。筆者は疑念を抱きながら、編集委員の一人である曲曉範東北師範大学教授に尋ねたところによると、日記の内容を、すべて公開すべきかについて、檔案館サイドは当初政治的な立場から難色を示したものの、最終的に編集委員の強い計らいにより、ようやく全文を公開できたということで

ある。改めてこの日記の内容の重さを感じさせられた次第である。

いずれにせよ、67年前の日記を発掘され、大衆の目に触れることが大きな意義があり、過去の歴史の一端を学ぶには、よい教材だと考えられる。上記の疑念を抱きつつ、今後は史実と照合しながら、綿密に調べる必要性がある。なお、日記の原文複写版も同時に閲覧できる日が来ることを願いたい。(完)

(本学教授)

テキスト

『轍印深深』(全四巻) 吉林省政治協商文史資料委員会 吉林市檔案局編 2011年
9月(内部発行)